異形の作家たち

ロマンを追う人びと

尾崎秀樹

作家たち

ロマンを追う人びと

尾崎秀樹

泰流社

異形の作家たち
——ロマンを追う人びと——
発　行——昭和五十二年三月三十一日第一刷
著　者——尾崎秀樹
発行者——西村允孝
発行所——泰流社
112 東京都文京区小日向二—十八—四
電話　〇三（九四七）〇七三〇
振替　東京〇—一六三七六五番
印刷所——誠之印刷株式会社
編集者——高橋　徹

0095-10007-4447

目

次

Ⅰ

一足早く生きた作家＝谷譲次……九
一人三役の年輪　九
多次元空間の軸　四七
堕落としての原点＝坂口安吾……八七
「堕落論」の衝撃　八七
戦後批判としての捕物帖　九九
空間と歴史の座標軸　一二五
虚妄なる底に＝深沢七郎……一三八
滅亡について　一三八
ラブミー牧場と石和町　一四四
庶民という地獄　一五五

Ⅱ

乱歩文学の全体像＝江戸川乱歩……一六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

北辺のエピキュリアン＝久生十蘭……一七七
伝奇ＳＦの境域＝半村良……一八八
もうひとつの裏＝吉行淳之介……一九四
鎧を着た耽美派＝国枝史郎……二〇〇
推理小説の原流＝黒岩涙香……二〇六
独身主義の底脈＝中里介山……二二五
Ⅲ
一九二〇年代の狂気と文学……二三九
大衆文学の逆ユートピア……二三九
日本人と〝殺し〟……二四六
あとがき……二五七
尾崎秀樹著作目録
初出誌一覧

装幀　秋山法子

異形の作家たち——ロマンを追う人びと——

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一足早く生きた作家＝谷譲次

一人三役の年輪

1

牧逸馬、谷譲次、林不忘の三つの筆名をもつ長谷川海太郎は、一九三五年六月二十九日に三十五歳の若さで急死したが、それはちょうど彼の個人全集「一人三人全集」が完結した二週間ほど後のことだった。

彼はその最終刊の月報で、この全集は自分にとって作家生活の一里塚であり、それを第二の出発点として、つぎの創作旅程に発足したいと述べ、もっとうんと偉くなったら、正直に自己の生いたちや思い出の全部を小説の形でさらけ出してみたい、いやそれほど文筆的位置と自信を得られたらどんなにか愉快だろうと思うとも書いていた。

それだけに彼は多くの語り残すべき主題を胸に秘めていたのであろう。その突然の死は、彼に

とっても運命の不意討だったのだ。その死を悼んでいくつかの追悼文が、新聞や雑誌に掲載された。

松本泰「毀された家」　七月一、二日　報知新聞
三上於菟吉「牧逸馬君の死」　七月二日　読売新聞
烏丸求女「一人三人の死を弔ふ」　七月二日　読売新聞
子母沢寛「牧逸馬君の哲学」　七月三、四日　報知新聞
森元秀暁「あの男が牧逸馬だったか」　八月五日　中国新聞
千葉亀雄「大衆作家としての牧氏」　八月号　中央公論
伊礼次五郎「少年時代の牧逸馬」　八月号　中央公論
長谷川淑夫「追憶」　八月号　中央公論
松本泰「繭を破る前」　八月号　婦人公論
片岡貢「牧逸馬の追憶」　八月号　文芸
読万巻楼主人「牧逸馬の死」　八月号　社会及国家
伊礼次五郎「牧逸馬の一生」　九月号　講談倶楽部

ほかにもあるかもしれないが、代表的なものとしては以上があげられる。そのひとつ、読売新聞掲載の「壁評論」は、長谷川海太郎の死を直木三十五の場合と比較してつぎのように述べていた。

「直木は上は大臣から下はおさんどんにまで読まれることを念願としていたが、それを見事にやってのけたのは牧逸馬であった。直木にはまだ文学の亡霊がとっついていたが、牧にとっては文学なんてものは銀三枚にも価しなかった。マンモスのまえに文学と自己を投出して、何の遅疑する所がなかった。彼はそれほど市場文学者として徹底し、日本人離れがしていた」（烏丸求女）

この文章には多少の毒があるが、しかし牧逸馬の作家としての位置をあきらかにしている。だがそれ以上に彼の立場を適確に表現したのは、つぎの菊池寛の言葉であろう。

「牧逸馬君の死は、我々にとって、やはり一つのショックであった。同君とは、公開の席上で一度挨拶しただけで、何の交際もなかったが、同業の情その急逝を惜しむものである。同君のような生活態度を取った人は、もっと長生して、所謂鎌倉文士などが老後窮迫してウロウロする所を超然として見下して居るようにならなければ面白くない。今死んだのでは、何と言っても、同君の敗である。しかし、同君が死んだので、ジャアナリズムが、作家に無理な仕事をさせなくなるとすれば、我々に取っては、一つの救いである」（「話の屑籠」）

アメリカから帰朝後、短時日のうちにマスコミに迎えられ、一躍花形作家になっただけに、牧逸馬は既成の文壇とかかわりをもつことがほとんどなく、冷たくあつかわれていた。彼がアメリカで身につけた合理的な生活感覚や意識からみれば、日本の私小説的な伝統や文壇ギルドの閉鎖性は無縁のものであったに違いない。彼がフランクであればあるだけ、かえってそのことが文壇人に忌避されるといった結果がうまれたのであろう。しかしこれはけっして彼のマイナスではな

く、むしろプラス面なのであった。

昭和七年一月号の「中央公論」誌上に、長く文壇的生命を維持する秘訣について語った牧逸馬の談話が出ている。

一、頼まれたら何でも引受けて書くこと。

一、期日までに必ず届けて編集に手数をかけさせないこと。

一、作品の善悪などは少しも問題にしないこと。

以上の三つだ。談話をもとにしているだけに、細かいニュアンスはつかめないが、いずれもマスコミで生きてゆく上での必須条件だといえる。戦後の流行作家はいずれもこれらのことを実行しているようだが、それを一九三〇年代に率直に述べ、実践したという点では、牧逸馬は十年、いや二十年早く生きた書き手とみるべきだろう。

2

ひとりでいくつもの筆名を駆使したという例はある。しかしその筆名のひとつひとつが独立した顔をもち、独立した印象を与え、独立した評価をうけているという作家は稀であろう。長谷川海太郎はまさにそのような三つの顔をもった作家だった。

ひとつは林不忘といい、時代小説を手がけた顔だし、ひとつは牧逸馬といい、ミステリーや家庭小説、ノン・フィクションに手をそめ、のこりのひとつは谷譲次と称してコントやへめりけんじ

ゃっぷ〉ものに人気を博した。今その林不忘の作品と谷譲次のそれとを読みくらべてみると、まったく別人の感さえうける。しかし冷静に考えてみると、林不忘、牧逸馬、谷譲次、すべて長谷川海太郎の顔なのである。それぞれが独立しながらひとつに統一された人格をもつ。まるで多面神を前にしている思いだ。おまけにそれぞれの顔が、量的にも質的にもひとりひとりの作家に見まがうほどエネルギッシュな面魂をみせており、別々の評価をうけているわけだから、まことに奇妙というほかはないのだ。当時のマスコミは長谷川海太郎のブリリアントな仕事ぶりにたいして、〝文壇のモンスター〟という異名を贈ったものだ。それがすこしもオーバーでなく感じられるのが長谷川海太郎の存在である。

林不忘は不朽の人気スターである、片眼片腕の怪剣士丹下左膳を創造して、昭和初期の大衆読者をひきつけ、牧逸馬は、「浴槽の花嫁」にはじまる怪奇実話もので、ノン・フィクションものの先鞭をつけ、谷譲次は〈めりけんじゃっぷ〉ものをとおして、昭和初期のモダニズム文学に新風をもたらした。ひとりの作家がそのひとつのパートを受けもつだけでも容易なわざではないのに、長谷川海太郎はそれを矛盾なくこなしてマスコミの寵児となり、忽然として去って行った、その意味では彼の全集が『一人三人全集』と銘うたれているのは、いかにも象徴的なタイトルだというほかはない。

もっともこの『一人三人全集』は河出書房新社の創案ではなく、新潮社が長谷川海太郎の生存中に全十六巻で刊行したシリーズのタイトル名である。そのアイデアが誰によるものであるかは

まだたしかめていないが、いずれにしても〝一人三人〟といった発想は、そのものズバリの表現だ。河出版がためらうことなくこの『一人三人全集』というタイトルを踏襲し、そこに戦後状況にふさわしいあたらしい意味づけをおこない、長谷川海太郎のそれぞれの顔をひとつにまとめて全集にくんだことは、それなりの意義をもつものと思われる。

それは一口にいえば、長谷川海太郎の文学的遺産を今日のマス状況下に洗いだすこころみであろう。どうしたわけか林不忘の顔にくらべて、牧逸馬や谷譲次の仕事は再検討がすすまなかった。林不忘のつくった丹下左膳のみ喧伝され、ノン・フィクションの先駆者である牧逸馬や、モダニズム文学の大衆版である〈めりけんじゃっぷ〉もののパイオニアとしての谷譲次の側面は、長く陽の目をみなかった。戦後も『世界怪奇実話』が復刻されたり、谷譲次ものの再発掘が「洋酒天国」の開高健らによって手がけられようとしたこともあった。しかしいずれもマス状況に生きるほどの波紋をよばなかった。それはなぜであるか。

ひとつには牧逸馬や谷譲次の仕事が新しすぎて、混沌とした戦後状況にあわなかったということが考えられる。作品がくさっていたわけではなく、むしろ新しすぎたのだ。実際に谷譲次のものなどを読んでみると、アメリカン・ジャズを聞くような軽快なテンポと、ウィッティな味があふれており、長谷川海太郎のたくましい才気を、その面からだけでも教えられるのだ。それにくらべると牧逸馬名で書いた家庭恋愛小説は、風俗小説一般の運命的な法則にしたがって、色あせた部分がみられる。しかしそれは時代衣裳の古さであって、作者の古さを意味しない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.